

# 1935～1996年の地籍簿資料からみた ディアリン村の人文景観の変化

グエン・ティ・ハー・タイン  
(河野茜・西村昌也 訳)

## Địa Linh Village from a Viewpoint of Transition in Human Landscape Based on Cadastres and Related Documents from 1935 to 1996

NGUYỄN Thị Hà Thành  
(Translation by KAWANO Akane and NISHIMURA Masanari)

フオンヴィン社ディアリンの1935年、1963年、1996年の地籍資料群の分析と土地の  
古老からの聞き取り調査などに基づいて、各時期の土地利用状況変化を明らかにした。  
近年の都市化に伴う宅地の増加と農地の減少や地片の細分化、川の浸食による川べ  
りの土地の減少などが明らかになった。また過去、ディアリンは非農業集落にもかか  
わらず各族により、公有地（公田、公土）の分配が、村社会のなかで厳格に行われて  
いたことも特徴の一つである。

キーワード：地籍、ディアリン（地霊）、ゴアトゥオン（Ngõa Tượng）集落、川べり、  
土地利用

### 1. 歴史的背景

地籍簿資料の中の地籍は、ベトナムの各村の土地利用や各土地地片の地主に関する適切な情報を提供  
するための最も重要な材料とされた。最初のベトナム全土での地籍調査は、阮朝の直接管理下で1805年  
～1836年に実施された<sup>1)</sup>。調査の主な目的は、土地税、土地利用管理のための基本システムを作成するこ  
とであった。地籍の研究分野では、Nguyễn Đình Đầuは地籍を収集し、詳細なデータ分析に多くの努力  
を払っている最も有名な学者である。彼の研究は、数冊の本と阮朝の地籍に関する論文と報告書を出し

1) Nguyễn Đức Kha, 2003 *Lịch sử quản lý đất đai*, NXB Đại học Hà Nội, Hanoi.

た<sup>2)</sup>。膨大な地簿コレクションの保存<sup>3)</sup>と Nguyễn Đình Đầu の研究のおかげで、19世紀の阮朝の土地利用と土地管理の詳細を理解することができる。

1884年、ベトナム中部と北部を保護領とする Patenotre 条約によって、フランスがベトナムで足場を得るのに成功した後、彼らは政治経済、金融、貿易、軍事などあらゆる面でその力を拡大し始めた。フランスは特に農業と土地管理に焦点を当てた。1930年～1939年、地籍書類を作りなおすためにフランスは大規模な土地の調査を体系的に行った。そして初めて、各村の土地地片図を描き (Thừa Thiên Huế 省を含む)<sup>4)</sup>、ベトナム中部で地籍管理を活性化するために利用された。しかしほとんどの学者は、フランス植民地化のもとで作られた新たな地籍簿資料には注目しなかった。それは恐らく、この種の資料は阮朝期地簿のように保存されなかったからである。1608件の漢喃研究所によって集められた阮朝期の古い地簿の中で、1900年～1914年の間に作られたものは、わずか110 (6.8%) 例である<sup>5)</sup>。現在まで、地理学の観点からの地籍書類によるデータを使う学者は、ほとんどいないということにも留意すべきである。

我々は、ミンタイン村 (旧ミンフオン村、タインハー村)、ディアリン村、バオビン村2008年9月でフィールドワークに行った際、ディアリン村のフランス植民地下で作られた古い地籍簿資料を撮影することができた。その資料は、父親が村の役員の書記をしていた古老が保管していた。地籍簿に加え、我々は4つの地籍簿資料を収集することができた。地簿摘録 (Trích lục địa bộ: 1935年)、田主簿 (Điền chủ bộ: 1935年)、土地境界資料 (Procès verbal de délimitation et de bornage: ~1930年代)、そして公田公土台帳 (Bản kê công điền công thổ: 1963年) である。1935年から1963年の資料からのデータに基づいてディアリン村の土地利用者や土地所有者の包括的な見解を得ることができることに留意すべきである。また、1996年に描かれた村の地籍地図や2010年の現地調査に基づく統計データを利用することで土地利用の変遷の比較は1935年から現在までの間に行うことができる。私はほとんどの学者が注目しなかったフィールド研究をにこの機会に利用した。それはフランス植民地時代の地籍簿資料のデータであり、地理的観点からディアリン村の人文景観の変遷を明らかにするためのものである。

## 2. 阮朝時代の土地管理

### 2.1 土地分類

阮朝時代、土地は基本的に、公土、私土、官土の土地の3つのタイプに分類された。

公土は、国家財産として見なされていた。そして定期的にフエの宮廷に納められる税金の代わりに、公土が地方の村に耕作や経営のために分配・供給された。

地簿にある上流の学者である Nguyễn Đình Đầu は19世紀初頭のベトナム全国の地簿から、公土はベト

2) 1997年までに、Hà Tiên から Thăng Long にかけて、全国の3分の2に亘る地簿を分析している Nguyễn Đình Đầu 1997 *Nghiên cứu địa bạ triều Nguyễn-Thừa Thiên*, NXB Thành phố Hồ Chí Minh, p.14.

3) 10,044件がフエの朝廷により保管され、それらは16000の村 (全国18000の村) からの16000冊の資料を含む。残り2000の村は散逸している。Nguyễn Đình Đầu 前出 p. 11.

4) Nguyen Duc Kha、前出、脚注 1.

5) Phan Huy Le (ed.) *Địa bạ cổ Hà Nội, huyện Thọ Xương-Vĩnh Thuận*, Vol.1, NXB Hà Nội, 2005, pp.11-12.

ナム南部で約8%、中部で35%、北部で30%を占めていたと考えている<sup>6)</sup>。公共耕作地は、水田（一期作田・二期作田）と畑地（野菜や根菜類が栽培される土地の種類を指す）を含んでいた。公共用的な宅地は、宅地、墓地、寺院、仏塔などで構成されていた。公土はフエ朝廷の管理下にあり、地元民は私用を許されるのみで、朝廷の許可無しには売り買いもできなかった<sup>7)</sup>。

私土：阮朝時代の私土の保有は住宅や耕地に適用された。個人所有の土地は、土地を耕す権利をもつ個人が所有していた。その代わりに、彼らは耕作に対して税金を支払う責任を取らなければならなかった。所有者は土地を売ったり、それを担保にしたり、自分の子孫に土地を継承させる権利を持っていた。もしフエの宮廷が共同目的のために私土を取り返すならば、彼らは土地所有者に補償金を払わなければいけなかった<sup>8)</sup>。しかし、民間の所有権は永久的ではなく、所有者は土地を放棄したり、十分な税金を支払えない場合は、土地所有権を手放すこともあった。逆にいくつかのケースでは、人々は再び土地を耕作し、政府に十分な税金を支払うことによって放棄地を私有化することができた<sup>9)</sup>。

官土（官田・官土）は籍田、官社田、官屯田、官寨土、官寨田などによって構成されている。このタイプの土地はフエの宮廷が所有しており、公土や私土のよりも面積的に小さい存在であった。一般的には、朝廷の高位官僚や関係者や王室関係者、または、仏寺に寄進される土地となった。19世紀の半までには、土地のこのタイプがすべて地元のための公土に変換された<sup>10)</sup>。

## 2.2 地籍簿資料

### 2.2.1. 地簿 (*địa bộ* もしくは *địa bạ*)

Nguyễn Đình Đầuによると、地簿は「村の土地利用の一般的なことから詳細まで書かれている文書である。まず、村の名前と、その村が属している大きな行政組織（社、総、縣など）の情報が書かれている。また、近村の東西南北の地域、そして耕作地、休耕地、池、森林、山岳地域の総面積も書かれている。第二に、そのリストには、土地の等級、土地利用のあり方、面積、栽培植物（もしあれば）、場所、土地の所有者などが載っている」<sup>11)</sup>。

ディアリン村の地簿は1935年5月25日に行われた。残念なことにディアリン村の地籍記録の残存部分は、174片しかなく、（全部で284地片あるうちの）174地片のデータしかない。フランス植民地時代における地簿の基本的な土地情報は、Nguyễn Đình Đầuが紹介した阮朝の地簿情報と同じである。そして、各土地地片ごとの由来、争い、財産分配、地主の変化（もしあれば）、所有者変化の理由、そして（もしあれば）新たな地主のプロフィールなど、より多くの情報が書かれている。

6) Nguyễn Đình Đầu、前出、脚注2、p.11.

7) Nguyễn Thế Anh 2008 *Kinh tế và xã hội Việt Nam dưới các vua triều Nguyễn*, NXB Văn học, p.77.

8) Nguyễn Thế Anh、前出、脚注7、p.81

9) Nguyễn Thế Anh、前出、脚注7、p.81

10) Thai Quang Trung, 2009. *Tình hình ruộng đất và kinh tế nông nghiệp Thừa thiên huế nửa đầu TK XIX*, Luân án tiến sĩ, code: 62.22.54.01, Hanoi, p53.

11) Nguyễn Đình Đầu、前出、脚注2、p.32.

### 2.2.2. 地簿摘録 (*Trích lục địa bộ*)

地籍簿資料を作り、管理するための例則（地簿の4頁目に書かれてある）によると、地簿摘録は、地簿管理の（守簿）によって、一定の金を収納する形で、土地管理母体に配られただろう。これはフランス植民地時代の地籍管理システムにおける新たな事項であった。村役人によって、あらゆる理由（移動、提供、譲渡など）での地主の変化が、抄本には記録されるようになった。地片の由来、受け渡し方法、そして新たな地主の名前、職業が正確に記録されるようになった。

2010年のディアリン村のフィールド調査を通じて、我々の研究グループもまた、8片の地簿摘録を集めた。それによって、Ngõa Tượng (ゴアトゥオン) 集落の東地区にある8筆は、Huỳnh Văn ThêとNguyễn Sanh Dương Cươngという二人の地主が所有権を持っているということをつきとめた。これら8つの摘録抄本は貴重な書類と考えられており。1982年以降、正式に民間の個人からディアリン村に、土地に関する村の所有権を証明するためのものとして移管された。そのことが、これらの書類には正確に明記されていた。

我々がディアリン村で見つけた別の資料は、前述の文書と同じ名前ではあったが、別の形式で別の役割を果たす可能性がある。その書類は1935年5月15日にフェで作られている。この資料は、ディアリン村の地簿として記録されており、資料には村の公土地片全てが、番号や地片面積（畝や高などのベトナムの伝統的面積単位による記述）が利用法等と共に記録されており、資料の片面にリスト化されて記録されている。また、もう片面には縮尺2000分の1で、ディアリン村の地図（摘録地図：Địa đồ trích lục）と、各地片番号が記録されていた。

### 2.2.3. 田主簿 (*Điền chủ bộ*)

田主簿では、トップの地簿管理の村役人は、村内のすべての土地所有者の名前を一覧表示し、隣の列にすべての地片の番号、および面積を記録させた。この資料は1935年に作られている。資料は村で民間地を持っている各地主の名前、職業、年齢が記載されている。公土の所有者は「村」として定義されている。

### 2.2.4. 土地境界資料 (*Procès verbal de délimitation et de bornage*)

我々が収集した地籍簿資料の中で、Procès verbal de délimitation et de bornageという文書は唯一フランス語で書かれたものである。フランス植民地時代に作られたようであるが、資料が作られた年は特定できなかった。資料の本文は村の境界、また村の各境界標の正確な位置について書いたものが含まれている。その資料ではディアリン村の境界線は正確であり、隣村との対立もないことを示している。

### 2.2.5. 公田公土台帳 (*Thống kê công điền công thổ*)

公田公土台帳はもう一つの重要な地籍簿資料である。これは、村の公土の使用や分布を管理するためにフランスの植民地時代後に作られている。

ディアリン村の公田公土台帳は、地籍調査に基づいて1963年に作られている。資料には次のような情報が含まれていた：1935年の土地の種類、1963年の土地の種類、地片の面積（フランスの面積単位、



hectares、acres、m<sup>2</sup>）、現在（1963年）の利用状況。特に耕作地は3つの種類に分けられている：一期作田、二期作田、そして畑地。1963年は、1935年にもととの地籍簿資料が作られて以来、土地管理のために正式な地籍簿資料が作られた最初の年であった。

以上が、筆者がディアリン村の土地データを分析するために使う主な資料である。

#### 2.2.6. 地籍地図

ディアリン村の地籍地図は、地籍調査会社が1996年に描いている。基本的に、この地籍地図は、1935年の地簿摘録の地図摘録本にかなり似ている。どちらの地図も村内の全ての地片を示しており、形状と位置においては正確に描かれている。ディアリン村の古い地図摘録本と新しい地籍地図では、いくつかの違いを指摘することができる。

(1)近代的な新しい地籍地図は、国家座標（VN2000）と新しい測量技術に基づいて描かれているが、古い地籍図は、地理的座標は表されていない。(2)新しい地籍図は、縮尺1000分の1である一方、古い地籍図は縮尺2000分の1である。(3)近代的な地籍地図は、各土地地片に番号と土地タイプ、また面積を書いているが、古いほうでは地片番号しか書いていない。読者は、地簿摘録本文の表で関連データを見つける必要がある。

### 3. 研究方法、問題、および解決策

この章では、分析のために使用される主なデータは、1935年～1963年にディアリン村の土地に十分な情報を提供する1963年の公田公土台帳と1935年の地簿摘録を利用する。公田公土台帳のデータ、地簿摘録、田主簿は土地所有権や民間地の地主の情報などのように公土の情報を確認し、さらには情報を補完するために必須である。

1935年、1963年、1996年の土地タイプの比較をする時に出てくる問題は、土地分類における違いである。1996年の土地分類システム（1993年の土地法に基づく）によると、住宅地は村の役所、ディン、廟や仏寺を含む他の公共利用地とは明確にカテゴライズされ、別な土地となる（*đất chuyên dùng khác*）。1935年の地図摘録本によると、ディン、廟や仏寺は別々のカテゴリーとされている、住宅地は村の役所と他の公共利用地を含んでいた。1935年、1963年と1996年に使われた2つの土地分類システムを統一するため、筆者は土地カテゴリーを体系化し、それを土地分類の一つのシステムに再び整理することを試みた。それは住宅地が住宅地と村の役所もしくは他の公共利用地から構成されるものとして分類する一方、ディン（亭）、廟や仏寺を明確に区別している。加えて、村の役所、ディン、廟や仏寺の名前はできる限り改定された地図に描いている。

もう一つの問題は、1935年、1963年、1996年の村の総土地面積が一貫していないということである。1963年まで、ディアリン村は別々にある2つの領域から構成されていた：一つは、ディアリンの現集落域で、村の主な領域である（図3、4、5）、もう一つは飛び地となっている水田域で、村の西北部の遠くに位置し、Triệu Sơn Đông（チウソンドン）、La Khê、（ラーケー）、Bảo Mỹ（バオミー）村の境界に位置している。本紀要、西村歴史地理論文図24の河泡）。1975年以後、ディアリン村の領土は現ディアリ

ンの集落域でしか構成されていない。それゆえ、ディアリン現集落域に関してのみ、1935年、1963年、1996年の村の土地利用を比較することができない。さらに、1963年までは、Ngõa Tượng (ゴアトゥオン) 集落 (ディアリン村の3つの集落の一つ) は、ディアリン村の管理下におかれ、私土とみなされており、田主簿のなかに地片の面積が記録されており、ゴアトゥオン集落東地区にある地片8筆の土地利用と地主名は、地主に配布された地簿摘録の抄本で明らかにされている。残念ながら、集落西部の地片情報が詳しく記録されていない。不十分なデータのため、ゴアトゥオン集落については別に議論したほうがよい。

筆者は、分析は地籍簿資料のみにしか基づかない場合は不十分であると思っている。他のソースからデータを調べる作業は、調査を補うのと同じくらいに、地籍簿資料のデータを確かめるために必要なことである。村に残された公文書を利用し、ディアリン村の何人かの長老に取材するアプローチをとった。

## 4. ディアリン村の人文景観の変遷

### 4.1 ディアリン村

過去に、ディアリン村の領域は、少なくとも14世紀までは Champa の人々が所有していたと推測されている。行政管理面では、地霊社は1550年代、67社のうちの一つとして、肇豊府思榮縣に属していたとされている<sup>12)</sup>。さらに、1776年に黎貴惇が書いた『撫邊雜録』によると、地霊社は肇豊府富榮縣の茂材総に移っている。村の境界が変わったかどうかは別にして、地霊社という名前が過去2世紀の間使われていたということは確かである。17世紀に6畝3高3尺で構成されている社の北部の領域が、広南阮氏政権から中国系住民の明郷 (明香) に譲渡され、地霊社は大変動を経験した。17世紀末には、1畝2高5尺4寸<sup>13)</sup>の土地が、フェ市中央部付近に中国人の商業活動を拡張するために、地霊社から移されている<sup>14)</sup>。西山朝の治世下 (1787年くらい) で、この移譲された領土は地霊社に再び帰することになった。商業活動者の安全、幸運、繁栄のために明郷の人々によって建てられた関帝廟は地霊社の領土内に位置しており、それゆえ地霊社に再び帰属している。

阮朝時代、地霊社は、国家の伝令所があったと言われているが、1935年の地霊社の地籍文書類では報告されていない。現在、ディアリン村はHuong Vinh (フオンヴィン) 社に属しており、周囲には、北にはMinh Thanh (ミンタイン) 村 (旧Minh Hương [ミンフオン] と旧Thanh Hà [タインハー] 村が合併)、西にはLa Khê (ラーケー)、南にはBao Vinh (バオヴィン) とThế Lại Thượng (テーライトゥオン)、東にはHuong (フオン) 川が位置している。

ディアリン村の公式の地籍書類によると、1963年までは、ディアリンは、Nam Hòa (ナムホア) とĐông Thành (ドンタイン) というたった2つの集落でしか構成されていなかった。ゴアトゥオン集落には独特

12) 地霊社は、1550年代と1776年に存在していることが、それぞれ『烏州近録』と『撫邊雜録』よりわかる。

13) 畝 (Mẫu)、高 (sào)、尺 (thước)、寸 (tấc) は、ベトナムの伝統的面積単位であり、中部ベトナムでは1 thước = 10 tấc; 1 sào = 15 thước; 1 mẫu = 10 sào = 500m<sup>2</sup>となる。

14) Chen Ching Ho 1961, "Làng Minh Hương và phố Thanh Hà thuộc tỉnh Thừa Thiên", *Tập san đại học*, Vol.3, p.102.

な歴史がある。ゴアトゥオン集落の最初期は他の村の貧しい移民が集住した状況で、1950年になって初めて集落ができた。それはディアリン村の行政管理下にあったが、1975年になってやっとゴアトゥオン集落は公式的に文化的社会的活動に参加し、村のソム（Xóm）となった。現在、ディアリン村の3つの集落はソム1（ゴアトゥオン集落）、ソム2（ナムホア集落）、ソム3（ドンタイン集落）と呼ばれている。

地理的には、ディアリン（地霊）村は明郷、清河社と褒栄の間に位置しており、両方とも17世紀～20世紀初頭までは賑やかな港町であった。褒栄と清河のように河川港や豊かな市場通りを手に入れられなかったにも関わらず、ディアリン村（地霊）は、部分的には隣村の商業活動の影響のおかげで、また部分的には木彫りと真珠象嵌、レンガの生産、木工などの伝統的な手工業の発展のおかげで、他の農村とは状況が異なっている。過去から現在にいたるまで、ディアリン村の人々の大部分は、農業活動よりも商業活動か手工業に従事していた。社史『フオンヴィン社の共産党の歴史』によると、1992年～2000年のディアリン村の労働人口（全部で1753人）のうち、50%は商業活動、23.6%は手工芸品作りに従事していた。ディアリン村において農業従事者の記録はない。

#### 4.2 ディア村の土地利用と土地管理の一般的な見解

土地利用に基づく場合、20世紀半ばに入るまで、地霊の主要領域は他の農村と同じく耕作地であったため、地霊と他の農村を区別するのは難しい。

表1では、1935年と1963年の耕作地の割合はそれぞれ58.6%、44.7%であったことが分かる。また、1935年には野菜や根菜を栽培するための畑地が耕作地の72.3%を占めており、総面積の42.4%を占めていた。1935年の住宅地と墓地の比率は、それぞれ20.8%、15.3%であり、村の総面積の二番目と三番目を占めている。1963年には、一期作の水田は41.1%と大きな割合を占めた一方、畑地は総面積の3.6%に減少した。この年、総面積の29.1%である住宅地と16.3%である墓地が、まだ二番目と三番目の割合を占めていた。

1935年と1963年の資料では、ディアリン村の人たちはまた、河泡（Hà Bầu）という、飛び地としての大きな耕作地を有していた（口絵6のMinh Thanhの土地の西隣にあるTriều Sơn Namの四角い飛び地

表1 1935年から1996年にかけてのディアリンの土地利用構造

| No | 土地の種類          | Area in 1935<br>(100m <sup>2</sup> ) | Area in 1963<br>(100m <sup>2</sup> ) | Area in 1996<br>(100m <sup>2</sup> ) |
|----|----------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1  | 一期作田           | 261.08                               | 660.88                               | 0.0                                  |
| 2  | 二期作田           | 0.0                                  | 0.0                                  | 237.92                               |
| 3  | 乾燥地（畑地：蔬菜や根菜類） | 681.46                               | 58.14                                | 199.18                               |
| 4  | 宅地（住宅地やその他目的）  | 333.64                               | 467.60                               | 671.60                               |
| 5  | 未耕作地           | 1.48                                 | 59.76                                | 10.16                                |
| 6  | ディン・廟・仏寺       | 80.52                                | 80.52                                | 76.48                                |
| 7  | 墓地             | 246.60                               | 262.00                               | 315.35                               |
| 8  | その他（池、叢林）      | 3.20                                 | 19.08                                | 20.72                                |
|    | 総 計            | 1607.98                              | 1607.98                              | 1531.41                              |

周辺、西村歴史地理論文図24参照)。一期作水田は61436㎡あり、二期作水田は54672㎡と推定された。この飛び地がいつ他村へ移ったのか、なぜ移ったのかは明確ではないが、1996年の地簿には、飛び地は描画されていない。

1963年～1996年までの期間に、土地利用の構造が大きく変化している。1996年には、住宅地は総面積の43.9%であり、村の大部分を占めている。付随して耕地面積の割合は大きく減少し、1963年に46%だったのが、1996年には28.5%となった。墓地はそれでも20.6%と三番目に大きな割合を占めている。

嘉隆帝によって発布された『皇越律令』（1815年）によると、村の公土は三年ごとに再分配することが決められている。通常は村の人口が増加すると、小さい地片を更に小さな地片にしなければならなくなる。1935年のフランス保護領時代から1963年のベトナム共和国時代の間、ディアリン村の場合は、土地の規制や土地管理において変化をもたらすと予測されたが、この間ディアリン村の土地利用において、政治的変遷は大きな変化を残していない。地籍や一般的な土地統計帳などディアリン村の土地の主なデータに基づくと、土地利用の変遷を除き、番号、面積、各地片の形は変化しなかった。

表1と図2では、1935年～1963年における土地利用の変遷は、畑地から一期作の水田や住宅地や墓地への変遷（変遷した土地合計の66.2%を占めている）を特徴づけていることが分かる。居住域の拡大は、161.72㎡の畑地が住宅地に変換され、変換された土地の21.2%を占めている。この変化を除き、1940年代には乾燥地（畑地）から他の種類の土地への大きな変換があった。それから1963年、乾燥地の155.32㎡が、再び耕作するための畑地に変換され、残りの部分（26.80㎡）は休耕地のままであった。従って、乾燥地の土地面積155.32㎡の変遷は表4.2では計算されていない。この変遷は、次の章で説明する。

### 4.3 集落：発展と様相

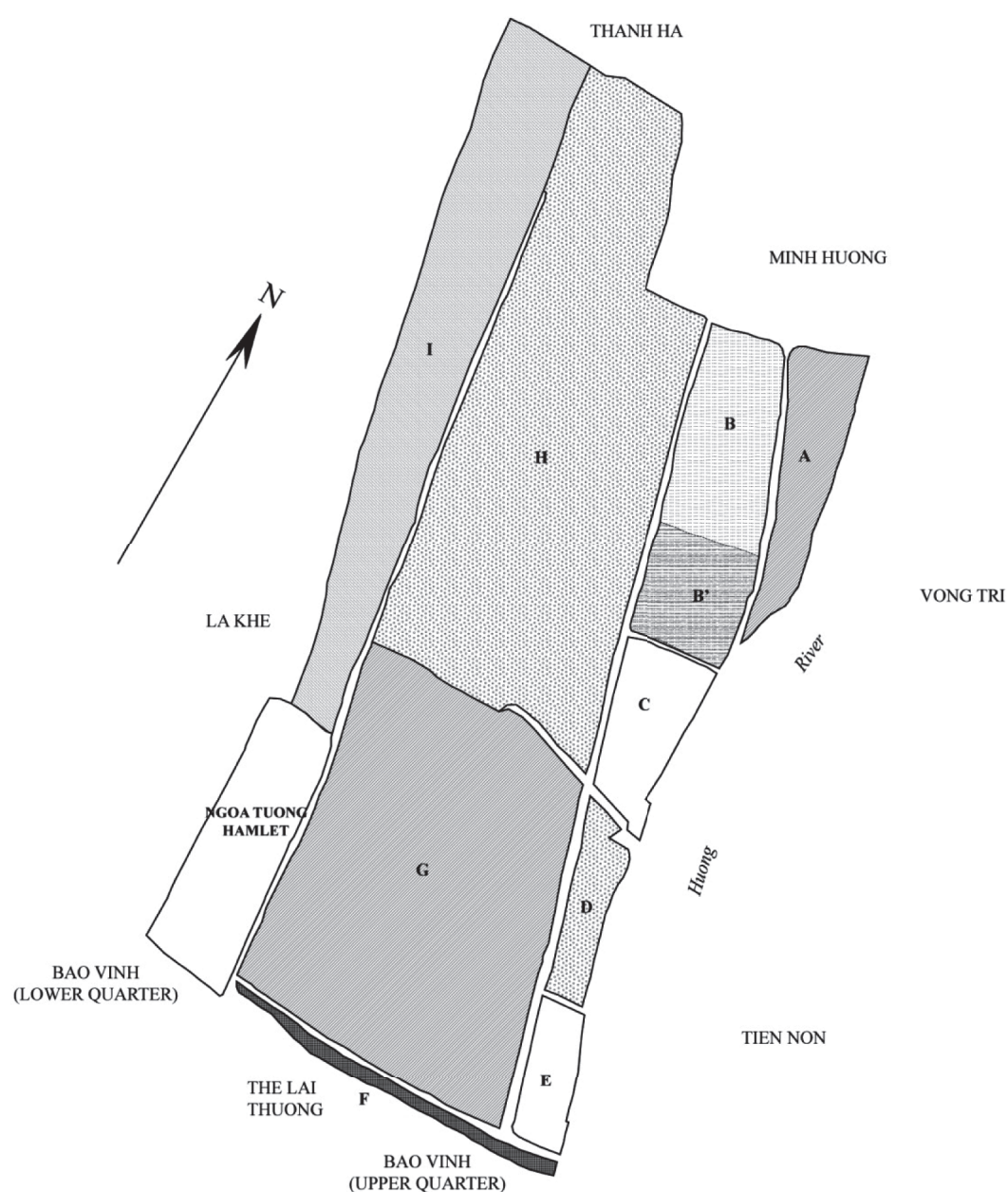
#### 4.3.1. 1935～1963年

集落の発展：1935年、ディアリンの住人は、主にフォン川と村南端の水路の間に位置する図1のD、E、F区に集まっていた。水路に架かる橋を渡ると、すぐにバオヴィン村の市場通りに入る。その通りには、20世紀半ばまで多くの商業船や貿易船が頻繁に来港していた。18世紀から19世紀初頭におけるバオヴィン通りの活発な商業活動が、ディアリン村の人々が村の南部への密集のひとつの要因となっていると推測する。また20世紀半ばまでは、ベトナム中心部の沿岸地域の人々にとっては河川交通がもっとも一般的な交通手段であったため、それもまた、ディアリン村の人々が川沿いに居住することに関係しているのだろう。1963年までは、ディアリン村の集落は北に拡張し、G、H区が無人のままであったが、川と農道の間にあるB、C区の土地は居住者でいっぱいであった（図4、5参照）。

主な道路：1935年のディアリン村の地籍抽出の土地台帳地図とĐào Duy Anh<sup>15)</sup>による18世紀の明郷の復元地図によると、ディアリン村の南部から北部へ一直線に通っている道路は、村の主要道路だったようである。実際、昔は川沿いの道路を村の人々がもっと利用していた。村の長老によると、道は輸送のための十分な幅（3～4m）があり、船つき場でもあり、20世紀半ばまで川沿いの地域で道路は、村の

15) Dao Duy Anh, 1943 *Phố Lữ-Première Colonie Chinoise du Thừa Thiên*”, *Bulletin des Amis du Vieux Hué*, Vol.3: 250-265.





Original map: Cadastral map of Dia Linh village in 1935, scale 1:2000

図1 ディアリン集落域の区分け詳細

主要道路として使用されていた。同時に、現在の主要道路は道の両側に草が生い茂った単なる農道であった。1963年から1968年の間、川沿いの道路は主にフォン川の侵食で消失した。この地域の川の流れは、アメリカの軍艦が頻繁に通過したため変化していったのである。その結果、ディアリン村の人々は、主要道路を、現在省道4号路と呼ばれる内側の道へ遷した。北部にあるミンタイン村の商店街と南部のバオヴィンの主道を結ぶ新たな主要道路は、食料雑貨店、飲食の屋台、ガソリンスタンド、携帯電話店、会社の事務所などができおり、ディアリン村の活気に満ちた経済を象徴している。さらに北のミンタイン村とその北の Triêu Sơn Nam (チュソンナム) 村は都市的景観ではなく、より田舎の平和で静かな



農村的景観に変わることには留意すべきである。

川沿いの道路の存在は、1935年の土地台帳データにおいて川沿い地域の土地区画と面積が1935年～1963年の間なぜ変化しなかったのかという疑問に答えてくれる。川沿い地域は地元で *Phố Lờ*（侵食された通り）と呼ばれ<sup>16)</sup>、頻繁にフォン川に侵食された地域にあったが、1935年の公土に関するデータと1963年の公田公土台帳のデータを比較すると、川沿いの道路地域が減少している一方、内陸地域は影響を受けていない。

フランス軍軍事施設建設：1947年にフランスとベトナムで激しい戦争が起こっている間、フランスは村の中心部にある関帝廟を囲むディアリン村に軍事施設を建設した。（関帝廟周辺：図4）。公田公土台帳を参照すると、著者はフランスの軍事基地の正確な位置を特定することができた。「現在の私用状況」というカテゴリの中で、「新たな土地が軍事施設から復帰した」とあり、軍事施設から耕作地に変わったということを言及しており、その一方で「軍事施設の土地は今だに耕作されていない」と、軍事施設の区画のままであることも言及している。よって、軍事施設は28の地片からなり、18212㎡をカバーしていたと理解できる。1959年、フランス軍軍事施設域はディアリン村に返還された。軍事施設が村の人々によって破壊された後、彼らは1963年までに土地の中心部を水田に変えようと計画した。

フランス軍基地の存在は、1960年代までディアリン村の居住形態に少なくとも二つの影響を与えていたようである。まず第一に、フランス軍の基地が一定時間内、村の内陸道の利用を抑制する要因であった。第二に、関帝廟周辺の宅地化が遅れ、村の中心にあった関帝廟は実際、数年もの間、田んぼに寂しく立っていたことになる。

これに加え、1935年において関帝廟はたった4840㎡の面積しかカバーしていなかったと推定される。1935年の村の地籍地図によると、関帝廟は内陸の村の道路（20世紀半ばの後、村の主要道路になる）から遠く離れたところに位置しているようである。これは、フランスが関帝廟を軍事施設に組み込んだ時、彼らは関帝廟の前から道路まで、軍事施設を建設したと推測される。

1963年までは、この土地は未だに休耕地であり、関帝廟の土地とみなされていた。そして、1996年のディアリン村の地籍地図では、この関帝廟は現在道路の近くにあることを示しているからである。また、関帝廟の面積は、現在は1935年よりも大きい6360㎡であるとされている。

#### 4.3.2. 1963～1996年

##### — 川辺りの変遷

筆者の推測と地籍地図によると、侵食が直接川沿い地域に影響を与えたと断言したい。川沿いの面積は1935～1963年と1996年を比較すると、明らかに減少している。確かに面積の減少は、新しい道路の建設、または現在の昔の測量法の違いに起因する間違いから派生する可能性はある。しかし筆者は村の人々

16) (1) Dao Duy Anh 1943 “*Phố Lờ*—première colonie Chinoise du Thừa Thiên” *Bulletin des Amis du Vieux Hué*, Vol.3, は、“*Phố Lờ*”を明郷の地元名称として言及し、18世紀末まで地霊社の北部を含んでいたとする。(2) Coronel Don Carlos Palanca Gutierrez, Dibujado が1863年に描かせた絵地図には、“*Phố Lờ*”が明郷の場所に使われている (H. Cosserat, “*Kinh thành Huế bản đồ học*”, *Bulletin des Amis du Vieux Hué*, Vol.20, NXB Thuan Hoa, 1933), p. 83. 明郷の領域は土砂堆積により拡大したものの、地霊は相対的に川の流れて削られている。

と同じように、面積減少はその川の浸食が原因に違いないと信じている。少なくとも地籍地図によると、村南西部よりも北西部のほうが大きな川の侵食があったようだ。また、川沿いの土地の大部分は最終的に1999年の大型台風によって失われた。その時のフォン川の水位は以前よりもかなり上がっていた。地元の役所は現在、効果的に川沿いの地域を河川浸食から保護するために、川の土手をコンクリートで固めている。

表2 ディアリンの区域単位での面積変化

| 区域（図1参照） | 面積（1935-1963年）       | 面積（1996年）            | 減少面積                |
|----------|----------------------|----------------------|---------------------|
| A        | 6,506m <sup>2</sup>  | 4,218m <sup>2</sup>  | 2,288m <sup>2</sup> |
| B        | 6,040m <sup>2</sup>  | 5,086m <sup>2</sup>  | 954m <sup>2</sup>   |
| C        | 5,844m <sup>2</sup>  | 4,771m <sup>2</sup>  | 1,073m <sup>2</sup> |
| D        | 3,792m <sup>2</sup>  | 3,380m <sup>2</sup>  | 412m <sup>2</sup>   |
| E        | 3,372m <sup>2</sup>  | 3,040m <sup>2</sup>  | 332m <sup>2</sup>   |
| F        | 1,948m <sup>2</sup>  | 1,876m <sup>2</sup>  | 72m <sup>2</sup>    |
| 総計       | 27,502m <sup>2</sup> | 22,371m <sup>2</sup> | 5,131m <sup>2</sup> |

上記の表2から、減少した5131m<sup>2</sup>と推定される面積のうち川沿いの地域は、村の減少総面積の67%にのぼり、1935年～1996年の間に減少していることがわかる。確かにデータの違いは、1935年の測量法における古い方法と1996年の新しい方法の間で違いはあるかもしれない。しかし、このデータはディアリン村の公式地籍文書で報告されているもので信頼できるものである。それゆえデータは、少なくとも他の信頼できるものが見つかるまでは利用することが可能と考える。

#### — フオンヴィン学校の建設

1935年～1963年までの間のディアリンの変遷を語るもう一つの主要なことは、村の学校の建設である。1962年8月には、ディアリン村のすべての主要な族を代表する42人は、カトリックの司祭<sup>17)</sup>が率いる La San という名前の私立学校の設立をする文書に署名している。1963年に公田公土台帳が作成されたとき、学校の存在を証明するものは何一つ文書に表されていない。おそらく学校は1963年に土地調査が実施された後に建てられたのだろう。それは13384m<sup>2</sup>の総面積、地片の22筆をに相当していた。学校の一部は古いフランスの軍事施設に建てられた（図4）。その土地は、次のような契約に従って移管された：(1)フオンヴィン社のすべての生徒は、幼稚園時から一年生までは無償授業を受けられる。(2)ディアリン村のすべての生徒は、4年生まで無償で授業を受けられる。(3)年間土地税は学校が負担する。1967年、その学校は収用され、公立学校となり、フオンヴィン学校という名前となった<sup>18)</sup>。1996年までに、学校の敷地の面積は7545m<sup>2</sup>に減少している。

－ 何人かの村人によると、関帝廟の面積は、取り囲んでいる家々の違法な拡大により減少し、1996年に

17) 1962年8月8日、La San 学校設立時に取り交わされたディアリンの公用地に関する取り決めによる。

18) Hương Trà 県からカトリック司祭への指示状があり、所有権を3日以内にフオンヴィン社人民委員会を譲渡し、フオンヴィン社人民委員会は学校を公立学校とする責任があることが述べられている。指示書の日付は1967年4月5日である。

は6360㎡だったのが、2006年までに6120㎡となった。

#### 4.4 住宅地：指標と機能

住宅面積の推移は、言うまでもなく、人口の変化を反映している。いくつかの簡単な指標を使用し、著者は住宅地の遷移を調べることによって、村の人口密度の変化を評価する。

表3 ディアリンの宅地

|             | 1935年             | 1963年             | 1996年             |
|-------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 土地地片あたり平均面積 | 596m <sup>2</sup> | 577m <sup>2</sup> | 293m <sup>2</sup> |
| あたりの地片数     | 17                | 18                | 34                |
| 地片の数        | 56                | 81                | 229               |

表3によると1935年～1963年の間、宅地地片の平均面積はほとんど変わっていないことが明らかである。しかし、1963年～1996年では大幅に減少しており、それは主に人口増加によって引き起こされている可能性がある。1996年における宅地地片の平均面積は、1963年と比較して半分以上減少している。これに対応して、1 ha 宅地面積当たりの土地の区画数は倍増し、1 ha 当たり18筆から34筆となった。1935年～1963年の28年間ではたった25筆しか増加しなかったが、その後33年間に148筆増加している。

1963年と1996年の地籍地図を重ね合わせることで、それぞれの土地の区画の分割を観察することができる。住宅地はより多くの道路や小道を加えられ、一般的により小さな地方に分けられた。村の土地地片は、連続的により小さい地片に分割されている（図7、8、9、10参照）。

#### 4.5 耕地と農業活動

##### 4.5.1. 1935年～1963年

1935年～1963年の間、ディアリン村は主に、他の農村のように、耕地（1935年に47.3%、1963年44.7%）で覆われていた。この間、土地の最も劇的な変遷は、乾燥地（畑地）から水田に変換されたことであった。総面積に対する水田の面積は、1935年の16.2%から1963年の41.1%に増加している。同時に、野菜や根菜類の栽培面積は40.69%から4.16%へと急速に減少した。1963年には、66088㎡の土地が水田として報告されている。1963年におけるディアリン村の公田公土台帳によると、村内の古いフランス軍軍事施設は既に破壊されており、軍施設の主要部分（15,532㎡）は、登記上新たに水田に戻されたことがわかったが、残りの部分（2,680㎡）は未だに休耕地であった。しかし、フォンヴィン学校が建設されるまでは、その土地は利用されないままであった。よって、1963年における村の水田の総面積を推測すると、18212㎡ある古いフランス軍軍事施設域は含まれていないようだ。

ディアリンの人々によると、村のもともとの開耕は8族によって統率されていたようだ：黎（3つの家族の分家を持つ：黎文、黎有、黎福）、張、陳、黃、阮、李の各族である。これらの族は阮朝期、公土の分配に優先順位を与えられていた。村が残りの耕作地を他の家系に割り当てたのは、これら8族に分配された後であった。その土地は各族の何人かによって耕作されるか、または他者に小作地として貸して耕作されていた。土地からの利益は、一部は祖先崇拜のために使用され、一部は毎年これらの各族に

よって共有分配されていた。場合によっては、耕作に従事していない村人でさえも、借り主や各族内の他のメンバーによる小作の収穫を与えられていた。ディアリンの村社会における各族の力は、20世紀前半において村の全ての耕作地の共同保有を維持することを可能にしていた。

かつて村の合作社の役人であった古老によると、南部の Ngô Đình Diệm 政権の政策である「田地改革」により、各農家には耕作地の10000～20000㎡が割り当てられた。その政策は、1955年～1962年まで続き、農民に均等に土地を配布して農業を発展させ、小作人が小土地所有者になることを助けるという目的があった。その時、ディアリン村のほとんどの世帯は、耕作地を賃貸し、土地の生産物を受け取っていた。土地の小作者の殆どが他村の人々であり、彼らはディアリンに常住し、農業で生計を立てていた。

#### 4.5.2. 1963年～1996年

1963年～1996年は、ディアリン村での耕作に大きな転換があった。1963年、ほとんどの一期作水田は、灌漑・排水システムの建設および栽培技術改善や稲品種改良のおかげで、二期作水田と畑地に変換された。この変換は都市からの食糧と人口爆発の需要を満たすために行われた。

1975年以降、土地集約化計画は、ベトナム社会主義政権によってベトナム中部と北部で採択され、合作社がディアリンで設立された。合作社は主に村での耕作地を管理するために機能した。その耕作地は全て公土であった。当時の経済の停滞と高い失業率から、ディアリンの多くの人々は合作社に加入したが、数年後、彼らのほとんどは農業で十分な収益を上げられなかったため、合作社を去り、他の仕事を探すようになった。現時点では、ディアリンには農家はないと考えられている。

表4から、耕作地地片の平均面積は、ディアリンの各土地地片の面積の保護により、1935年～1963年の期間は、耕地の地片の数が緩やかに減少している。また、乾燥地（畑地）の地片あたりの平均面積が相対的に増加（682㎡/地片から969㎡/地片へ）し、水田地片の平均面積が1935年には1187㎡/地片であったのが、1963年には806㎡/地片へと減少したことが明らかである。

Pierre Gourou の研究<sup>19)</sup>のおかげで、ディアリン村のケースと紅河デルタ地域の間で、1 ha の耕作地当たりの土地地片数の単純な比較を行うことが可能である。1930年代の紅河デルタにおける彼の調査によ

表4 ディアリンの耕作地

|           |    | 1935年              | 1963年             | 1996年              |
|-----------|----|--------------------|-------------------|--------------------|
| 地片の平均面積   |    | 773m <sup>2</sup>  | 817m <sup>2</sup> | 1017m <sup>2</sup> |
| 土地の種類     | 水田 | 1187m <sup>2</sup> | 806m <sup>2</sup> | 991m <sup>2</sup>  |
|           | 畑地 | 682m <sup>2</sup>  | 969m <sup>2</sup> | 1048m <sup>2</sup> |
| Haあたりの地変数 |    | 13                 | 13                | 10                 |
| 地変数       |    | 122                | 88                | 43                 |

19) 紅河平野は、二つのベトナムの最大の平野のうちの一つで、開拓が最も古く、人口密度が高い地域である。Gourou Pierre 1936 *Les paysans du delta Tonkinois: etude de geographie humaine*. Les editions d'arts et d'histoire. Paris.



ると、この人口密集地域で1 ha 当たりの平均土地地片数は10片であり、特殊な場合においては、32片もあった<sup>20)</sup>。ディアリンの場合には、1935年には平均で15片/haであり、紅河デルタの平均値よりも高いが、1963年にはhaあたり13筆に減少している。

1996年における水田地片の平均面積は、1963年と比較して185㎡/ha 地片に微増し、乾燥地（畑地）の平均面積も79㎡/ha 地片に微増した。結果として、増加は耕作地地片の平均面積において発生し、約200㎡/地片となった。これは、ある土地地片の出現（地片番号95）によって部分的に説明される。つまり、その地片は面積が9070㎡あり、他の土地地片よりもかなり大きく、ディアリン共同墓地の近くに位置していた。標高の低い土地であったため、村人たちは水田にすることができなかった。そして、たった1つの世帯が2005年までこの土地で野菜を栽培していた。もしこの土地地片が計算に含まれない場合、1996年における土地地片の平均面積は約825㎡と推測される。

ディアリンにおける耕作地のha 当たりの平均土地地片数は、1935年～1963年または1996年までほとんど変わっていないと結論できる。もし、地片番号95の土地地片が計算に含まれなければ、1996年の平均値もあまり変わらない。明らかに平均値は、ディアリン村の人口増加に比例して変化してはなかった。加えて、結論を補強するための長期間に亘る農業労働者や経済に関するデータはないが、著者はディアリン村における耕作地でのわずかな推移は、村の農業活動と同じように農業労働者の数が減少する一方で、村の耕作地地片の数は年々減少していることによると確信している。現在の農業分野は村の経済のほんのわずかな部分にしか役立っていないということは明らかである。

#### 4.6 私有地

ディアリンの領域大部分は、公土であったことに留意すべきである。1935年～1963年において、宅地6地片しか私有地がなく、わずか4480㎡であり、ナムホアとドンタイン集落の総住宅面積の14.52%に匹敵する（図6、表5）。

ここで、2人の明郷の個人に属する2つの私有地地片があったことが分かるのが興味深い。どちらの土地地片も村の北側に位置しており、18世紀においては公式的には明郷の領域であった。この2人のうちの1人は、他の個人（不明）から土地を買ったことが知られている。残りの1人の情報においては記録されていなかった。しかし、これらの2人の明郷の土地はおそらく、祖先から受け継いだものではないだろう。なぜなら、地霊が明郷の人々から土地を再獲得した後には、関帝廟の場所を含めてディアリン村の住宅地の土地を所有できる明郷の人々がいなかったからである。この2人は、家族がその土地を所有していたため、それを購入したと思われる。1935年～1963年における私有地地片の量に基づき、ディアリンの私有地は、ベトナム中部全体の状況と比べて非常に小さな割合であると結論づけられる。筆者の意見では、阮朝が地霊に対し厳格な支配をした他、地霊の有力氏族の集合体の存在も大きな理由であろう。すでに述べたように、ディアリンの大部分人々は農業活動に従事しなかった。にもかかわらず、農地は社会的権利と平等な待遇を与えることを目的とし、村の各有力族の家系に分配するよう残されている。1935年から1975年における、いくつかの政策と土地管理の変化にもかかわらず、これら6筆

20) Pierre Gourou、前出、脚注 8、p. 320.



表 5 1935年の土地所有者情報

| 1935年の<br>土地所有者 | 地片番号                    | 年齢 | 職業   | 故郷   | 由来                             | 1974年の<br>所有者 <sup>21)</sup> |
|-----------------|-------------------------|----|------|--|--------------------------------|------------------------------|
| Nguyễn Liên     | A43、628m <sup>2</sup>   | 45 | 森林管理 | Phu Vang 縣<br>Vinh Ha 社<br>Ha Trung 村 <sup>22)</sup> | 1926年2月22日に Cung Thi Cau 氏から購入 | Lê Thị Lang                  |
| Nguyễn Tuyên    | A44、972m <sup>2</sup>   | 29 | 監考   | Huong Vinh 社<br>The Lai Ha 村                         | 1925年4月15日 Cung Thi Cau 氏より購入  | Nguyễn Tuyên                 |
| Phạm Mạnh Hoàng | A45、788m <sup>2</sup>   | 43 | 侍講   | ディアリン村   | 1880年2月23日 Huynh Khiem 氏より購入   | 永春寺                          |
| Lê Diệu         | A49、800m <sup>2</sup>   |    | 世継ぎ  | ディアリン村   | 1917年8月4日 Cung Dinh Cai 氏より購入  | Lê Hòe                       |
| Ngô Kim An      | A156、1040m <sup>2</sup> | 30 | 通訳   | フオンヴィン社<br>ミンフオン村                                    |                                | Ngô Tú                       |
| Vương Lợi       | A189、252m <sup>2</sup>  |    | 世継ぎ  | フオンヴィン社<br>ミンフオン村                                    | 購入                             |                              |

は民間地として保有され、少なくとも1974年までは庭地として課税され続けていた。各地片の土地所有者は変更できたが、土地面積はそのままだったようである。土地地片 A189と A156は、たった一人の土地所有者の保有のもとにあった。加えて、永春寺という仏寺（図6：土地地片 A45）が既に1950年に建てられたにもかかわらず（1970年に Phạm 族によって与えられた土地に移された）、仏寺の出現は1963年の公田公土台帳にも記録されていない。永春寺は、少なくとも1974年までは私有地としてみなされていた<sup>23)</sup>。1975年から現在までの間、ディアリンの土地はベトナムの他村と同じように、共有地（公土）として定義されている。以前の土地私有は完全になくなっている。

#### 4.7 ゴアトゥオン集落の定住

この期間のゴアトゥオン集落の設立は、ナムホアとドンタイン集落の発展とは異なっている。ゴアトゥオンは、Vân Cù（ヴァンクー）と Nam Thanh（ナムタイン）村と同様、阮朝の下での都城建設のため、磚などを製造するための窯が設立され、フエ都城の建設のため製品が供給された<sup>24)</sup>。フエ都城の完成に際し、阮朝の皇帝は、ディアリン村の一部の土地を tổ thợ nề（左官などの祖先）の香火田に指定した<sup>25)</sup>。その土地は現在ゴアトゥオン集落にあり、二つの地域（西地区と東地区）に別々に設立され発展した。西

21) Thừa Thiên Huế 省の354村落より（Nguyễn Đình Đầu, 前出, 脚注2、p.330）。

22) Dia Linh Village、前出、脚注38。

23) Dia Linh Village、前出、脚注38。

24) Trần Đức Anh Sơn, 2010. “Gốm Việt Nam trong quần thể di tích cổ đô Huế: xuất xứ, loại hình và chức năng”, pp. 306–307. In Nguyễn Quang Trung Tiến, Nishimura Masanari eds., *Văn hóa–lịch sử Huế qua góc nhìn làng xã phụ cận và quan hệ với bên ngoài*, NXB Thuận Hóa, (本紀要、訳出論文参照)

25) Nguyễn Đình Đầu 前出、pp.334、336頁では、Phú Ốc は Quảng Điền 縣に所属し、と Thanh Lương は Hương Trà 縣に所属する。(2)1835年以降、Phú Ốc は Hương Trà 縣に所属している。Đo Bang et.al (ed.), *Từ Điển lịch sử Thừa Thiên Huế*, NXB Thuận Hóa, Hue, 2000, pp. 735, 770.

地区は8筆によって構成されているが、2人の塙窯の生産者（Huỳnh Văn ThếとNguyễn Sanh Dương Cường）に1915年に分配された（図11、12、表4.7）。

これらの地主については、ディアリン村の地簿摘録において、<sup>フー オック タイン ルオン</sup>Phú ỐcとThanh Lươngという彼らの故郷の情報を除いては、何も記載されていなかった。これらは8筆、合計3556㎡となっている。左官職人は封建社会ではそれほど尊敬される地位ではなかったのに、彼らの故郷でもない村に大きな土地をなぜ彼らが手にすることができたのかという疑問が湧いてくる。著者は、この2人は左官の祖先崇拝の代表者であったのではないかと考えている。いくつかの理由で、土地はディアリンの行政管理下に置かれていた。1935年のこれらの土地使用状況は、ディアリン村の地簿と地籍摘録両方において、住宅地として認められているが、実際にそのように土地を利用していないようだ。

1950年代以降、村人たちは他の地域の貧しい人々が、ここに来住するのを許可した。新たな住民は、土地代を払う必要はなかったが、土地を売買する契約はなかった。最低の義務として、毎年左官職人の廟の祭祀へ貢献することが必要であった。加えて土地保有の証拠だてを行う必要はなく、1982年になって8つの地簿摘録が、所有家族からディアリン村に戻された<sup>26)</sup>。ゴアトゥオン（ラーケー村に隣接）の西地区の地籍摘録分は6280㎡あり、ディアリン村の地簿が1935年に作りなおされる以前に、Lễ Khê（ラーケー）村に残されたと言われている。確かに、ディアリン村の1935年の田主簿には、これらの土地地片はラーケー村が所有していると記録され、東地区の所有者は、地籍などではラーケー村の人々とされるにもかかわらず<sup>27)</sup>、フランス植民地時代の境界登記資料（Procès verbal de délimitation et de bornage）にはディアリン村の領域として記録されており、法的にゴアトゥオンの土地はディアリンに所属していたと判断される。これは、ラーケー村側が一度も地籍摘録を返すことがなかったにもかかわらず、実際の土地所有を取得していなかったことを示している。1950年には、ゴアトゥオンへの最初期の移民の一人Trần Văn Hiềnは、ラーケー村の人であった。この特別な場合を除き、ゴアトゥオン村のほとんどの移民は他村からの人々であった。

1935年、ディアリン村の地簿によると、たった一筆が乾燥地（畑地）として定められているが、残りは宅地として報告されている。また、1963年におけるディアリン村の公田公土台帳は、共有地のみを報告しているため、ゴアトゥオン集落の各土地地片の使用状況は確認できなかった。この土地について古老から聞き取りをすることができた。Đỗ Văn Sum氏（60歳）によると、彼の家族は1960年にその集落に引っ越し、彼の父に譲渡された早稲に使用される地片を除き、土地は宅地のために使用された。1996年、わずかの乾燥地（畑地：土地地片A191）を除き、ゴアトゥオン集落は住宅地で満たされている。

ナムホアとドンタイン集落で起こった状況と類似して、人口増加は土地地片の平均面積の縮小に影響を与えている（1935年から1996年にかけて約半分となった）。ゴアトゥオン集落では宅地地片の細分により、わずか12筆から30筆となっている。宅地のha当たり土地地片の数も、また1935年と比べ1996年には1.8倍となっている。ゴアトゥオン集落は、まだ新しい居住地であり、宅地地片の平均面積はナムホアと

26) これら8の地片に関する地簿摘録は、1982年9月2日に所有者家族代表者Le Quang Soから、ゴアトゥオン集落の代表者Truong Van Lapへ引き渡されている。

27) 文書では、土地所有者の個人名は記されておらず、ラーケー村と記されるのみである。

ドンタイン集落（272m<sup>2</sup>/地片）よりも大きい、ha 当たりの土地地片の数は他よりもかなり少ない（37 筆/ha）。

当初から、ゴアトゥオン集落の人々は、生計を立てるために主に農業に従事していた。しかし彼らは、ディアリンの住人ではなかったため、耕作地は与えられなかった。彼らはディアリン村か隣村（大規模な土地をもっていたが、人口の少なかった La Khê 村など）から耕作地を借りるしかなかった。1975年になってようやく、ゴアトゥオン集落の住人は、村の農業活動においてディアリン村の村落社会活動に参加することができた。今日では、ゴアトゥオン集落の住人は、小売、レンガ製造、日雇労働、バイクの運転などの非農業活動に従事している。

## 5. 結論

学術的見解から、ディアリン村の地籍文書類は重要な資料であり、統計データを提供しているだけでなく、間接的に村の景観に新たな視点を提供しているということは明らかである。文書類はある程度まで、その村の社会、人口、経済の一般的な変化を示している。加えて、地籍情報を付け加えた地籍地図は注目すべきものである。これらの地図は、ベトナムの過去と現在の村に関する詳細なデータを提供している。この種の地図は、正確に各地片と村の境界を描いている。地籍地図は現在、現代的な測量技術を使用して製作されている。

しかしながら、地籍書類のデータから分かることは注意して解釈すべきであり、特に軍事施設関連など、古い地籍文書で報告されていることと実際ディアリン村で起こったことの違いに注意しなければならない。

1935年～1996年のディアリン村の景観の遷移は、3つの異なる政権時代を跨いでいる。第一は、1935年、国全体がフランスの植民地化の下にあった。第2は1963年、権力がベトナム共和党政権下の Nguyễn Văn Thiệu 政権に移る直前の Ngô Đình Diệm 政権の最後の年にあたる。第3は、現在のベトナム政権下である。こうした時代を通じて、ベトナムは独立を達成し、近代的な発展を遂げている。政治的な変遷は部分的に古い地籍文書で使用される言語に反映されている。1935年における地籍文書は、ベトナム語と漢文で書かれ、フランス植民地時代に作られた境界登記資料（Procès verbal de délimitation et de bornage）はフランス語で書かれ、1963年の公田公土台帳は、近代的ベトナム語でのみ書かれている。ディアリン村において、フランス植民地支配はフランス軍軍事施設の出現とそれにとまう居住域の拡大限界に象徴されている。ベトナム共和党政権下の期間は、フランス軍軍事施設跡地で行われた村の最初の私立学校の建設と後の公立学校化に特徴付けられている。そして現在は、ディアリン村における社会文化的遺跡や公共建築の大部分が保護されていることに特徴付けられている。それらは関帝廟、ナムホアとドンタインの廟、泥瓦祖廟（左官の祖廟）、フオンヴィン学校などである。

さらに、1935年から1963年において、ディアリン村での集落域の拡大は大きな変化ではないが、その後のディアリン村の急速な都市化は、農地から宅地への大きな変換によって達成されている。

ディアリン村における集落は、二つの典型的な地元の村人の特性を示している。一つめは、川を基盤にした生活である（特に1935年～1963年の期間）。その地域は、しばしば自然災害、洪水、暴風によって

脅かされるにもかかわらず、人々は川沿い地域に住むことに魅せられている。二つめは、非農業ベース、つまり伝統的な手工業生産による経済活動である。それらは、タインハーやミンフオンの旧外港区、バオヴィンの市場通りとの直接的な繋がりにみられる。筆者は、少なくともディアリン村の南部区域でのより高い人口密度は、19世紀の前半期においてバオヴィン市場通りの大きな発展と道路により直結していたことが南部のディアリン村の拡大と密集に影響を与えたと考える。別の視点から見ると、自然災害は村人たちの生活に直接的に影響を与え、結果として1996年に至るまでに川沿い地域の生活が劇的に衰退したと考えられる。

最後に、ディアリン村の村落社会のしっかりした紐帯性は、少なくとも二つのことに反映されている。第一は、大量の公土（共有地）が、過去、国の至る所で起こった共有地の私有化の時でさえも、村での有力氏族たちに分配されることによって守られてきたことである。第二は、ディアリン村の人々はゴアトゥオン集落の土地の一部を外部からの移民に譲渡したが、1975年までディアリンの村落社会に参加する公式的な権利を彼らに与えなかったことである。

1935～1996年の地籍簿資料からみたディアリン村の人文景観の変化（グエン）

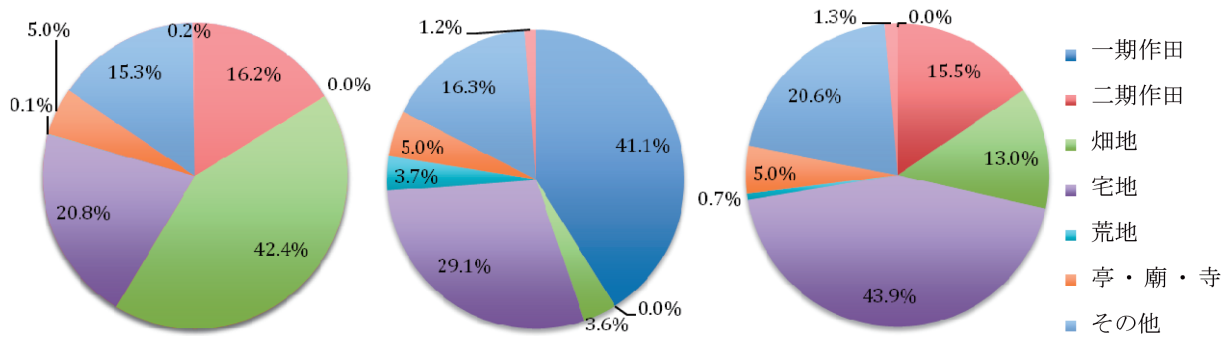
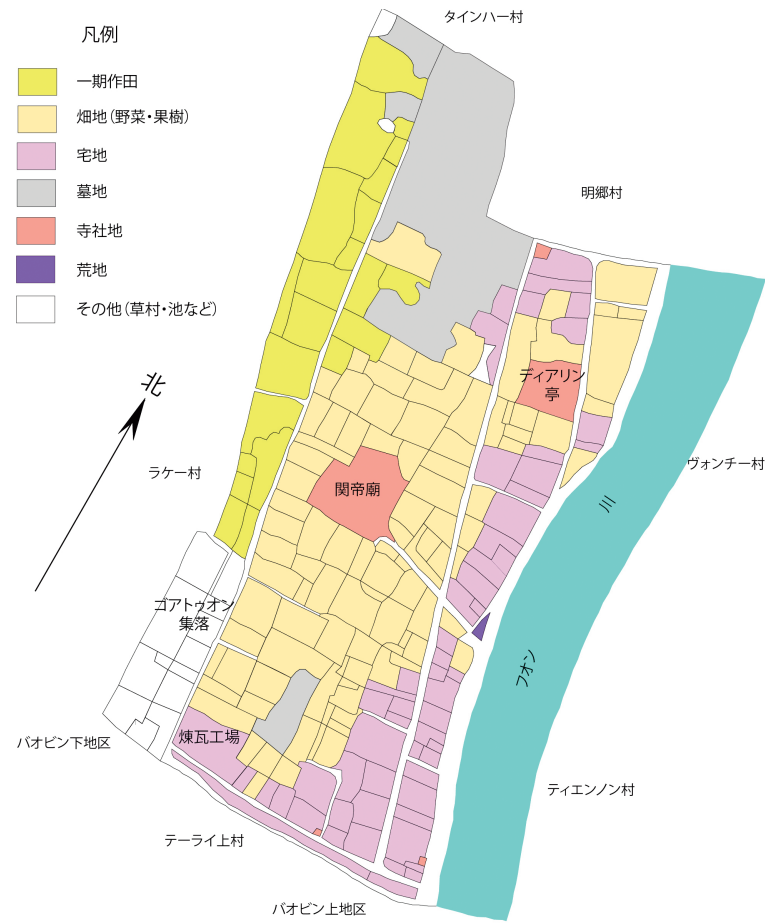


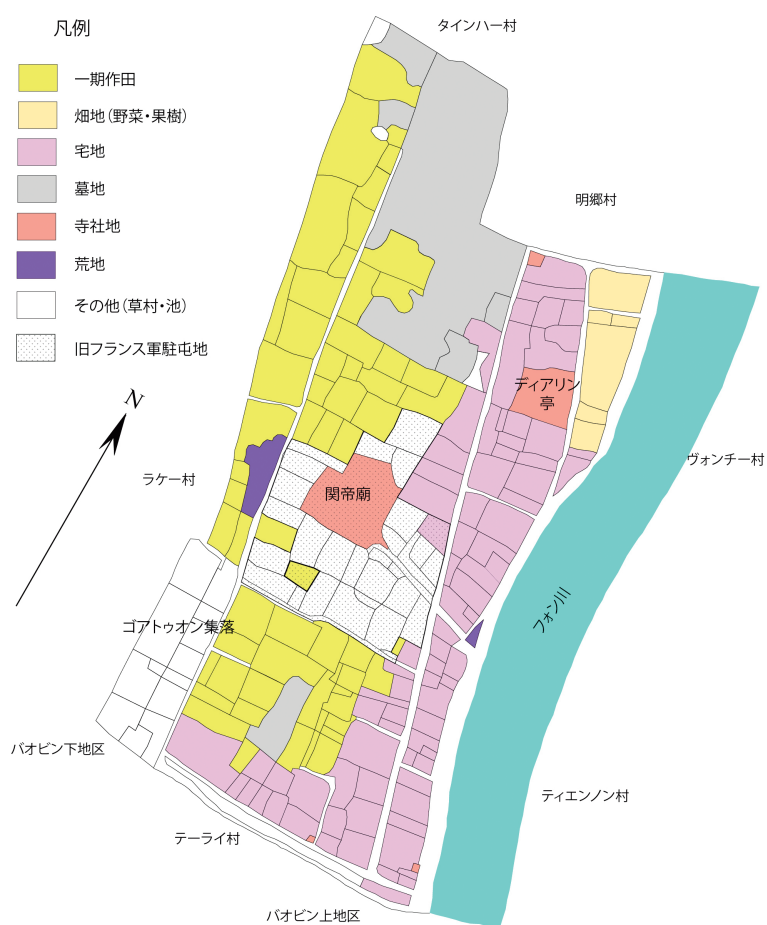
図 2 a 1935年の土地利用状況 図 2 b 1963年の土地利用状況 図 2 c 1996年の土地利用状況



原図:ディアリン村の地籍図(1935年)

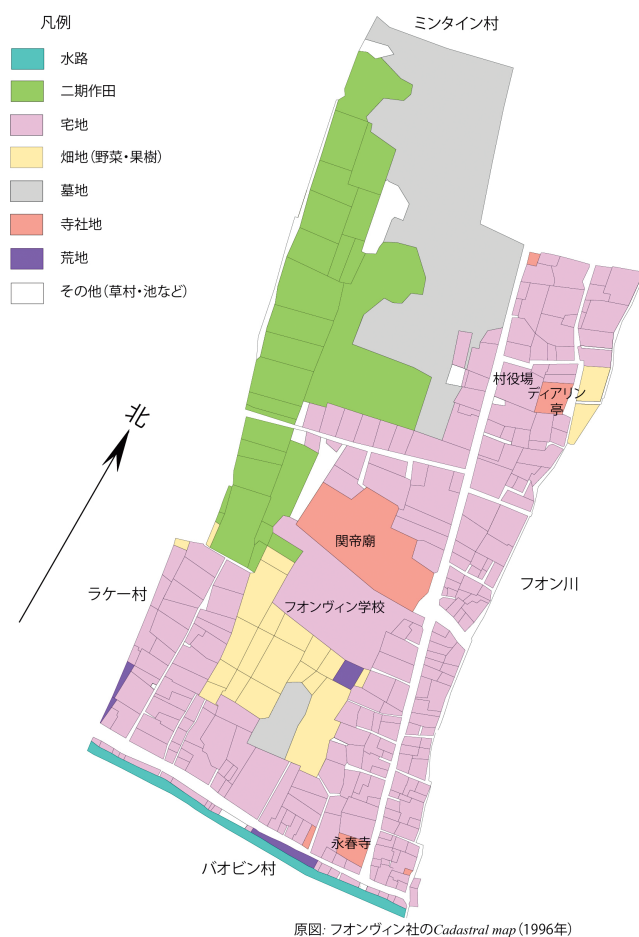
図 3 1935年ディアリンの土地利用状況





Original map: Cadastral map of Dia Linh village in 1935, scale 1:2000

図4 1963年ディアリンの土地利用状況



原図: フオンヴィン社のCadastral map (1996年)

図5 1996年ディアリンの土地利用状況

1935～1996年の地籍簿資料からみたディアリン村の人文景観の変化（グエン）



図6 ディアリンに分布する私用地（1935年）

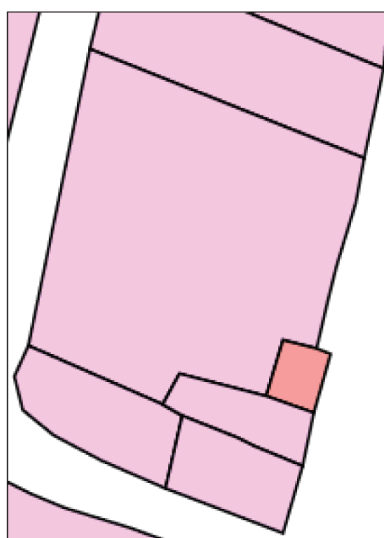


図7 1963年ディアリンの南端域宅地一部、地片は  
かなり大きい

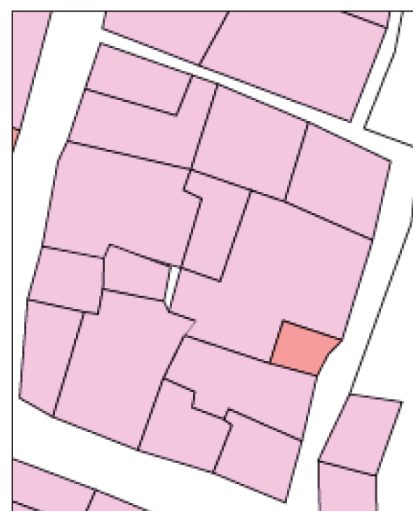


図8 1996年のディアリンの南端域宅地一部、地片  
は細分化されている

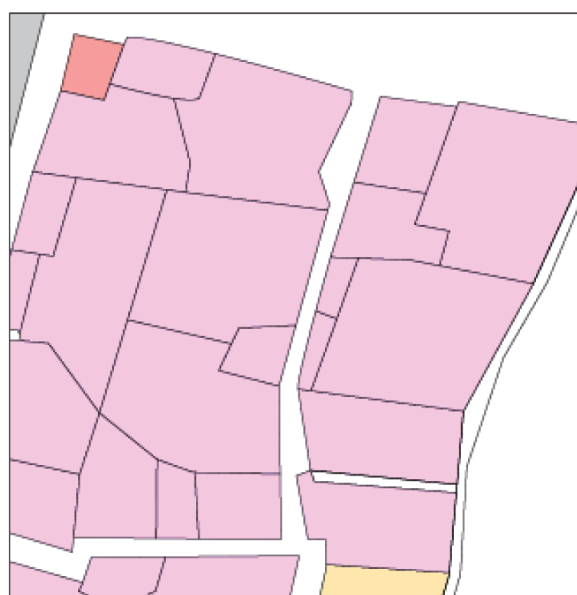


図9 1996年ディアリンの北域の宅地

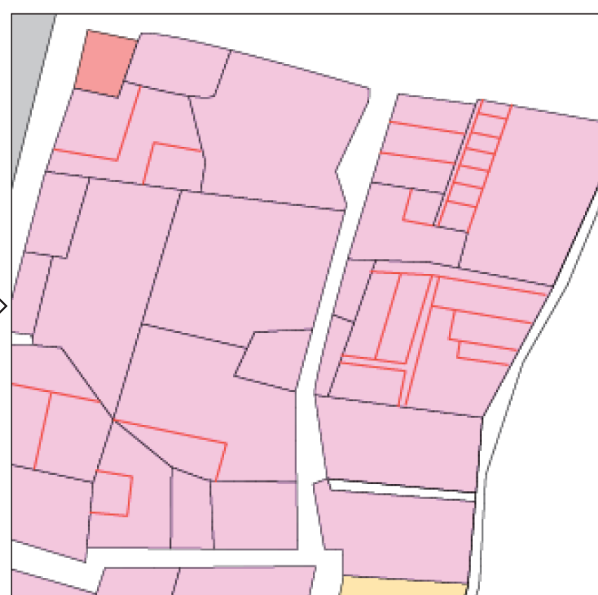


図10 2008年ディアリンの北域の宅地. 地片が細分化されている

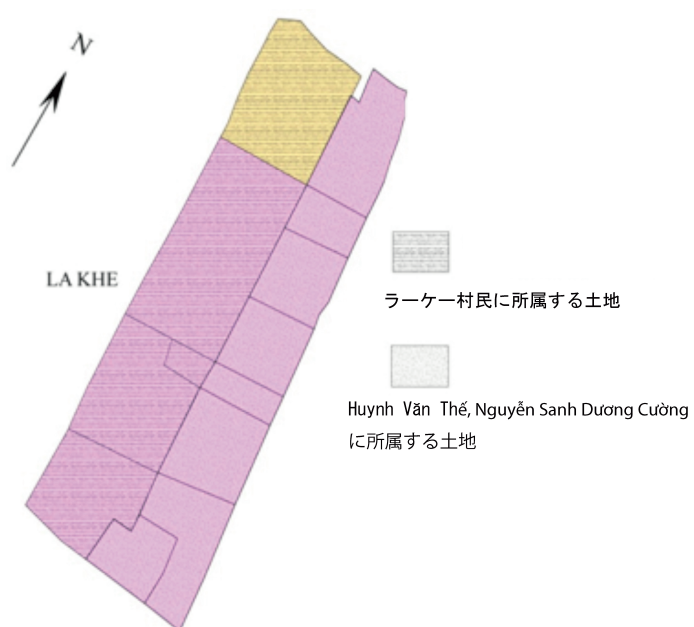


図11 1935年ゴアトゥオン集落の土地使用状況

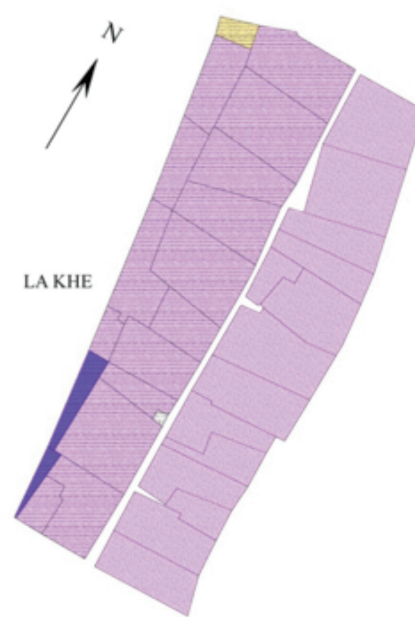


図12 1996年ゴアトゥオン集落の土地利用状況